

私たちは、全能で聖なる三位一体の神、†父、子、聖霊を、今、そして常に、そして永遠に、賛美し、称え、愛し、崇めます。

私、B.は、神から、神の聖なる御心を行うことに忠実に努める者は、常に神の恵み、愛、そして喜びを味わうことを教えられました。聖なる神は善行を行うのを助け、また、人々に善へと導き、良い祈りを捧げるよう啓示してくださいます。そして、それが神の聖なる御心であるならば、その祈りを人の心に注いでくださるのです。

私の経験によれば、日々そのことに努めず、心から神の聖なる御心を成し遂げようと願わない人は、繰り返しある種の霊的な暗闇に陥ることになります。たとえ善良なクリスチャンでありたいと願っていても、人は悪魔によって誤った考え、言葉、行いに影響を受け、善の道から逸らされてしまうことがあります。

これは、過去数年間、ユリヤナ・エバートと私が聖霊による祈りを書き記していた際、私自身も何度も体験したことです。

私が週の間、聖なる神の御心を果たすために誠実かつ真摯に努力したとき、神の聖霊が私の中で働き、言葉を授けてくださったことを実感することができました。

それに対して、例えば日常生活の中で一度でも自分の意志を「押し通して」、自分のやりたいことを実行してしまったときは、その後、ある種の霊的な錯乱や混乱に陥りました。

救い主は、私が一度も尋ねたことのないにもかかわらず、私が御前で心を閉ざしていたとユリヤナに告げられました。また、ユリヤナも聖霊によって、私が聖なる神の御前で心を閉ざしていたと、何度か私に告げました。

以前、私はいつもそのことに不思議に思っていました。なぜなら、「神の御前で心を閉ざす」ということが、そもそもどういったことなのか理解できなかったからです。

この真理は司祭たちにも当てはまります。もし彼らが、愛する神が御心を成し遂げる助けと恵みを授けてくださるよう、昼夜を問わず切に願い、祈り求めなければ、霊的な暗闇に陥り、たとえその意志を持ち続けていたとしても、神の御心を認識し、それに従うことが困難になってしまうのです。

これは、私の確信によれば、すべての人にとって極めて重要な気づきであり経験です。私自身もこれを何度も経験してきたため、ここに書き留めておきます。

残念ながら、このテーマがこれほど重要であるにもかかわらず、司祭たちがこれについて説教することはほとんどありません。

たとえ不注意や無頓着、あるいは怠惰から、神様の声には耳を傾けなかったり、「都合がいい時だけ」しか聞かなかつたりしたとしても、御心を全うしようとしても、たとえ後に再び真剣に神の御心を全うしようとしたとしても、人は霊的に目がくらみ、混乱してしまうことがあります。

人が心からの悔い改めと回心を経て、全能で聖なる三位一体の神——父、子、聖霊——が自分に何を求めておられるかを、再びはっきりと認識し、感じ取れるようになるまでには、時間がかかることがあります。

これもまた、「霊を見分ける賜物」の一部である。

人はこの賜物を神に謙虚に求め、全能の神の御心を

果たすために、日々真剣に、忠実に、そして誠実に努めなければならない。

神が私たちに一見「何も語らない」ように見えたり、心に何も啓示してくださらなかったり、あるいは聖霊からの助言を認識できなかったりしても、それは神の責任ではありません。むしろ、人は絶えず自らの心を吟味し、本当に神に心を開いているかどうかを自問しなければなりません。

この認識を書き留めておきたいと、私は心の中でずっと考えていました。なぜなら、特に司祭職の候補者たちにとって、これは極めて、極めて重要だと考えているからです。

司祭が聖なる神の御心を行いたいと願うなら——そしてそれは心から願うべきことです——、そのために努力し、祈りの中で繰り返し聖なる神に、その聖なる御心が何であるかを尋ねなければなりません。そして司祭が決断を下した後は、その決断が神の御心にかなっているかどうかを、謙虚に改めて神に尋ねるべきです。

日々の祈りにおいて、この重要な賜物を求める願いを決して欠かしてはなりません。

悪魔はあっという間に干渉してきます。私の経験上、ほんのわずかな不注意や優柔不断ささえも、人が混乱したり、誘惑されたり、目がくらんだり、影響を受けたりする原因となり、その結果、害を受けたり弱体化したりすることにつながりかねません。そうになると、人はもはや何かを変える力がないと感じてしまうかもしれません。それは一種の倦怠感や疲労感として現れることもあります。

もし人が何らかの事柄において悪魔に屈し、神の御心ではなく自分の意志を押し通してしまうならば、たとえ自分が善行を行っていると感じていたとしても、まさにその事柄において繰り返し試練にさらされることになるのです。

神の御心なしには、結局のところ、何事も真の善にはつながりません。特に、他の人々から称賛や承認を得るために何かを行う場合はなおさらです。

すべてのことは、神において、そして神と共に為されなければなりません。

そうでなければ、たとえ本人が意識的にそうしようとしていなくても、人は心を閉ざしてしまう可能性があります。

それゆえ、この認識を日常生活——祈りの中で、仕事において、そして余暇においても——どのように実践するかを考え、吟味することは非常に重要です。

すべては、全能にして聖なる、三位一体の神の
至高の栄光のために。 アーメン。

www.gnadenvolle-gebete.de

ベルンハルト、サミュエル